

乳幼児をもつ親の自己分化度と親性に関する研究
A study on the relationship between self-differentiation and
parenthood among the parents having infants

指導教員 井村 たかね教授

臨床心理学研究科 臨床心理学専攻 09-0706 大塚 敦美

I. 問題と目的

カップルは、配偶者選択でも、夫婦の共同生活の適応にも、子育てをする上でも、親世代、あるいは祖父母世代の影響が最もよく表現されるといわれている（平木,2000）。青年期は、原家族から経済的に自立する時期であると同時に、心理的にも自立を果たす時期である。つまり、この時期に自己分化が課題となる。「自己分化」とは、「個人が家族システムの中で他の家族メンバーの感情や思考や不安に巻き込まれず、自分自身のポジションを確立すること（Bowen,M., 1988,2001）」と定義されている。夫婦としても、親としても自己分化の発達には重要である。親になる時期は、夫婦という二者関係から子どもを含めた三者関係へと変化するため、親性も成長しなくてはならない。「親性」とは、「母性と父性を統合した性質で、親が自分の子どもを養育しようとする性質（林,2006）」と定義されている。従来、親の性質を表す用語として「母性」や「父性」が用いられてきたが、ジェンダーフリーの概念として「親性」という用語が広がりつつある。

現代における子育ては、男女共同参画社会の時代に移行しつつあることから、両親ともに育児への参加が求められている。子育てを行っていくことにおいて親性の発達は重要であり、その中で親子関係や夫婦関係だけではなく、原家族との関係が注目されている。先行研究では、原家族との関係において、自分の親との関係性の変化などの研究がされてきたが、自己分化の観点からの研究はあまりなされていない。そこで本研究では、乳幼児をもつ父親と母親を対象に、自己分化度という観点に注目し、自己分化度が親性と深い関連があるものと仮定し、原家族を含めた家族関係が子育てにどう関連するか検討を行なうものである。さらに、子育てを経験することによって自己分化や親性に变化があるものという仮説をたてその点の検討も行う。

II. 仮説

- ①自己分化度の各因子間と親性の各因子間に関連がみられる。
- ②第二子以上育てている人は、第一子を育てている人よりも親性が高くなる。
- ③第二子以上育てている人は、第一子を育てている人よりも自己分化度が高くなる。

III. 方法

■予備調査

目的：自己分化インベントリーの短縮版を作成する。

調査対象・調査時期：大学院生 10 名を対象とし、2010 年 2 月に実施した。

手続き：自己分化インベントリーの短縮版は、自己分化インベントリー（平木・野末・岸・安藤，1998）をもとに作成した。KJ 法に類した方法により、70 項目から 45 項目を選定した（25 項目削除）。

■本調査

調査対象：関東の私立保育園 2 園，私立・区立幼稚園 3 園，その他 0 歳から 6 歳の乳幼児をもつ保護者を対象に 684 部（父親 684 名・母親 684 名：合計 1368 名）配布した。有効回答数は，父親 266 名（平均年齢 37.7 歳， $SD=5.6$ ），母親 352 名（平均年齢 35.6 歳， $SD=4.7$ ），合計 618 名を対象とした。

調査時期・調査方法：2010 年 7 月上旬～9 月下旬に，質問紙調査を実施した。

調査内容：①自己分化インベントリー（短縮版），②親性への発達尺度（及川，2005b）の 2 つの尺度及び，③フェイスシートの全部で 85 項目から成る質問項目を用いた。

IV. 結果と考察

因子分析の結果，自己分化インベントリー（短縮版）は，「母親や実家との自律的親密性」，「配偶者との自律的親密性」，「父親との自律的親密性」，「世代間の融合」の 4 因子が抽出された。また，親性への発達尺度（及川，2005b）は，「社会的展望」，「抑うつ」，「家族の絆」の 3 因子が抽出された。

仮説①の検証のため，父親・母親の混合による自己分化と親性の関連を調べた結果，自分を育ててくれた両親や配偶者との距離感を適切にとれ親密な関係を築けているほど，社会的展望がもて，自分の家庭を築くために必要な家族の絆を強く感じるという結果が得られた。また，自分を育ててくれた父親や配偶者との距離感を適切に保て，世代間の関係が良好なほど，抑うつ感情が低くなった。特に，自分の母親や実家との関係が良好であると，社会的展望がもて，配偶者との関係が良好であると，家族の絆を強く感じ，抑うつ感情が低くなるという結果が得られた。

また，性別による自己分化と親性の関連を調べた結果，「社会的展望」との関連において，父親と母親は共に，実父，実母，配偶者との関係の良好さが関連し，父親は特に自分を育ててくれた父親との関係が良好であること，母親は特に自分を育ててくれた母親や実家との関係が良好というように，同性の親との関係が社会的展望に影響するといえる。「抑うつ」

との関連において、父親は実父、実母、妻、子どもとの関係が関連し、母親は、夫との関係のみが関連している。また、「家族の絆」との関連において、父親は実父、実母、妻との関係が関連し、母親は、夫との関係のみが関連している。父親・母親ともに、特に配偶者との関係が良好であることが、「家族の絆」を強く感じさせ、さらには「抑うつ」感情が低くなることが明らかとなった。配偶者との関係が良好であると、家庭生活が安定し、さらに家族の絆が高まり、それと同時に抑うつ感情が低くなるということにつながると考えられる。このことから、原家族を含めた家族関係が良好であることが、親性の発達を促し子育てに関連することが考えられる。これらの結果から、仮説①はほぼ実証された。さらに、性差による違いがみられた。

仮説②を検証するために、自己分化について子どもの人数別の差を調べた。その結果、自己分化には子どもの人数による差がみられなかった。父親・母親ともに、もともと自己分化が高ければ、第2子以上の子どもを育てていくにあたって、変わる必要がないことが考えられる。また、最初の育児をすることで自己分化が進み維持されていることも考えられる。一度培われたことによって第2子以上の子育てに対応していると考察される。以上の結果から、仮説②は実証されなかった。

仮説③の検証のために、親性について子どもの人数別の差を調べた結果、子どもの人数において親性の発達は、父親と母親の間に違いがないことが明らかとなった。自己分化と同様に、もともと親性が高ければ、第2子以上の子どもを育てていくにあたって、変わる必要がないことが推察される。つまり、親性は初めての子育てにおいて発達が大きいことが考えられ、第2子以上の子育ては最初に獲得した親性によって行っていくようになると推察される。また、近年、親になる前段階にある世代への親準備性の教育や学習がなされてきていることも影響していると考えられる。以上の結果から、仮説③は実証されなかった。

本研究から、原家族を含めた家族関係が良好であること、つまり、自己分化度が高いことが、親性の発達を促し子育てに関連することが考えられる。すなわち、青年期から若い成人期を経過するときに、どれだけ人格的発達（アイデンティティの発達）がなされているかということが問題である。子育てがうまくいっていない場合、その親の原家族を含めた家族関係を見直す必要があると考える。子育て支援としては、子どもとの関係だけでなく原家族との関係をも含めた広い視点からの支援が重要となる。